



連載① 自分もいつかは「高齢者」～高齢者的人権を考える～
明日の自由を守る若手弁護士の会 共同代表 黒澤いつきさん

憲法13条、25条で自分らしい人生を

生きている限り、だれもがいずれは高齢者になります。今は若くとも、「高齢者的人権」は「将来の自分の人権」。当たり前のことですが、案外それに気付いていない人も多いようで、その証拠に高齢者福祉を目の敵にする風潮が広がっていたり、高齢者福祉を削る政策が支持されがちです。

高齢者にも自分らしい人生を歩む人権があり(憲法13条)、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利(25条)も保障されます。年を重ねればそれなりに老化現象は生じ、さまざまな疾病にかかることもあります、医療・介護サービスに頼ることは当然予想され、適切なサービスを受けて人間らしく、かつ自分らしい生活を送ることは決して「ぜいたく」でもなんでもないわけです。

お金はミサイルよりも、いのちと健康・人権に

しかし、どう考えても日本の高齢者福祉政策は不十分です。介護事業所の倒産が相次いでいるのは深刻な介護離職や経営悪化が大きな原因ですが、そこには国が介護報酬を引き下げ、職員の賃上げをはじめ待遇改善にまったく関心を持たないという冷淡な姿勢があります。医療費も、高齢者の窓口負担をより増やす姿勢一辺倒です。こうした政策を進める政府や政党は必ず「少子高齢化」「財源がない」を理由にしますが、いやいやいや…じゃあ長距離ミサイルを爆買するお金はなんですか、边野古新基地建設費はなんですか、と言いたくな

りますね(専守防衛に長距離ミサイルなんて不要ですし、地盤がユルユルな辺野古に基地を建設することはそもそも物理的に不可能なことも、すでに明らかです)。軍事費については財源なんて考えないどんぶり勘定を許しておいて、市民の命・健康・人権に関わる福祉政策については途端に「イヤ財源がない」と渋る姿勢は、あまりにも優先順位を間違えていて、人権意識が欠如しています。

世代間対立の構図は「優生思想」

また「高齢者福祉に予算が偏りすぎているから若者の生活が苦しい」という論調で“世代間対立”をあおり、福祉政策の削減をうたう政党や政治家もいます。しかし冒頭で述べたとおり全員がいずれは高齢者になるのであり、しかも高齢者のケア政策を削減すれば打撃を受けるのはその家族ですから、「高齢者vs若者世代」などという構図はどのアングルから見ても間違います。働いていない(働けない)人のケアをムダと考える発想があるなら、それはおぞましい優生思想そのものです。こうした「高齢者攻撃」は、そもそも人権を十分に理解していない政治家が多いからこそ起きる現象ではないでしょうか。



世界の人権保障

国連と「日本高齢者人権宣言」

全日本民医連 事務局次長 林 泰則さん

いま、国連では、女性、こども、障害のある人に続き、高齢者的人権を保障する国際条約を制定する努力が重ねられています。日本ではその動きに呼応して、2022年の日本高齢者大会(京都)で「日本高齢者人権宣言」が採択されました。「5つの基本原理」のひとつに「ケア」を掲げています。さらに「高齢者に保障される人権」(全部で23の人権を列挙)の一番目に「年齢による差別の禁止・女性高齢者など差別を受けやすい高齢者への平等な権利保障」を挙げ、「長期ケアを受ける権利・ケアする人の権利」では、高齢者の尊厳、独立と自律、プライバシーが守られる質の高いケアの保障と合わせ、ケアする家族、家族以外のケアの担い手(ケア労働者)の人権保障も謳っています。

福祉の先進国といわれるデンマークでは「福祉の3原則」(継続性・自己決定・自己資源開発)に基づき、ケアと住まいが重視され、「住まいに合わせてケアを変える」ことが基本とされています。日本では、必要とされるケアに合わせて住まいを変えることを余儀なくされる現状があります。

※「日本高齢者人権宣言」は
Webページで紹介

寄稿 「デンマークの社会福祉施策と高齢者の生き方」

澤渡 夏代プラントさん(デンマーク在住)

本文はこちから

https://www.min-iren.gr.jp/care_cafe-world



Webページのご案内

学習動画、参考文献、関連資料、寄せられた声などを掲載しています。

» 次回予告 保育とケア実践「ケアの倫理」を深める/シリーズ第2回「ケアの倫理、誕生の歴史」など。

2025年4月号外

「ケアの倫理」café vol.1

民医連新聞 (1966年9月13日)
第三種郵便物認可

2025年4月発行
vol.1

「ケアの倫理」café

民医連新聞発行元 全日本民医連機関連合会 発行人 森本 啓介 〒113-8465 東京都文京区湯島2-4-4 平和と労働センター7F TEL 03-5842-6451 FAX 03-5842-6460 URL <https://www.min-iren.gr.jp/>
編集/全日本民医連職員育成部、人権と倫理センター 監修/明日の自由を守る若手弁護士の会 岡山県労働者学習協会

全日本民医連
Webページ

それぞれの声に耳を傾け、ケアに満ちた社会を描こう

「ケアの倫理」初めて聞く人も多いと思います。コロナ禍以降、ケアによるやく光が当たりました。

みなさんは誰をケアしていますか?誰からケアされていますか?気づいてても気づかなくても、日常にケアはたくさん。

職場をみれば「社会に不可欠な仕事なのに、なぜこんなに待遇が低いの?」「人手不足や制度にしばられて思うような実践ができない」。疑問や悩みがつきません。

また、貧困と格差の広がり、様々な差別や人権の抑圧、暴力や戦争が絶えず、ケアがないがしろにされ続けています。

「ケアの倫理」は、ケア不足の世界に「ケアニーズに応えようとしている政治」という視点を与えてくれます。

『ケアの倫理』Caféは、日々のケアに関する「なぜ」を「ケアの倫理」の視点からときほぐし、そこから生まれる声を聴き合う場として準備しました。「Café」としたのは、気軽に自分の想いを語れる“場所と雰囲気”を一緒につくりたいというイメージからです。

7回にわたりお届けします。生活や仕事だけでなく、平和や環境、人権や憲法にまでその話題は広がります。

ケアに関する物語は、職種やセクシュアリティなど様々な属性、その人の歴史や生活環境などによって多様です。

それぞれの声に耳を傾け、互いに関心を向け、尊重され、ケアされる「Café」。ケアに満ちた新しい社会とはどのような社会なのか、みんなで考え、描いていく「Café」。そんな「Café」になるとよいですね。

わたしの語り 介護とケア実践

社会福祉法人千葉勤労者福祉会
介護福祉士 門脇 めぐみさん

「関係性」がつむぐ介護現場のケア

新型コロナウイルス感染症が蔓延した際は、介護現場は利用者主体のケアから一変し、密閉・密集・密接を避けなければならぬ状況となりました。職員は緊張した生活の中、感染防止対策の負担が増え、家族の面会・行事などは中止、会議もリモートや文書伝達となり、すべての人間関係に距離が出来てしましました。非常事態の中では、忙しさで口調が強くなってしまったり、感染の不安から「座ってて」など利用者の行動抑制をしてしまったり、介護する側とされる側に分断されてしまいました。困難な状況の中で介護職のやりがいや役割を見失い、介護する職員もケアを必要とする「困っている人」だったのです。

その状況改善の第一歩として職員が集まり、本音を出し合い、話し合える場を持ちました。「みんなで話せたことで安心した」「言

いたいことが言えてすっきりした」という声に、職員が心身ともに健康でなければ良いケアが出来ないと実感しました。

「ケアの倫理」が重視している「関係性」は、ケアの担い手とケアの受け手との関係性にとどまらず、ケアの担い手同士の関係性にもかかわります。ケアの担い手である私たちは日々悩み、葛藤し、行き詰まることがあります、一緒に取り組む仲間がいることで頑張れることもあります。ひとりで抱え込まないために相談できる仲間や職場づくりが大切だと思います。

一方、介護保険制度の改悪により、どんどん働きにくい環境となっています。ケアの担い手も受け手もケアされる社会へ、制度改革

「ケアの倫理」と「民医連の介護・福祉の理念」

介護とは日常生活を送ることが困難な方に対して、本人の意思を尊重しながら生活をサポートし、自立を支援することとされています。また、支援上で「何を大切に介護するか」という介護観は利用者の生き方を左右する重要なことです。「民医連の介護・福祉の理念」の「3つの視点」(※)をふまえたケア実践は介護が必要な方への直接介護、家族を含めた多職種協働、制度改善運動まで多様です。人権と尊厳を守り抜く無差別・平等の介護・福祉の実践は、まさに「ケアの倫理」であり、お互いに響き合うものだと思います。

(※)「民医連の介護・福祉の理念」の「3つの視点」。①利用者のおかれている実態と生活要求から出発します、②利用者と介護者、専門職、地域との共同のいとなみの視点をつらぬきます、③利用者の生活と権利を守るために実践し、ともにたたかいます。

「民医連の介護・福祉の理念」

1面 介護とケア実践

2・3面 「ケアの倫理」を深める/シリーズ 第1回ケアの倫理との出会い

4面 日本国憲法とケア 連載①自分もいつかは「高齢者」～高齢者的人権を考える
国連と「日本高齢者人権宣言」/ Webページ のご案内「デンマークの社会福祉政策と高齢者の生き方」



シリーズ 「ケアの倫理」 を深める

「ひと月でいいから、もう一度介護させてよ、お母さん」。作家の落合恵子さんは、ご自身の母の介護をして、やがて見送ったあと、息せき切って走り回っていたケアの日々を懐かしみ、この言葉を記している(『母に歌う子守唄』その後~わたしの介護日誌』朝日文庫)。私は10年前に本書を読んだとき、それまでイメージしていた「介護はしんどい。できれば避けたい」という見方が変わったように思う。ケアはつらい。でもそれは、豊潤な時間をもたらすものもあるのではないか。それを体験として実感したのは、私の相方が難病の

人間にとてのケア

私たち一人ひとりは、例外なく、自力では生存できない状態で生まれてくる。赤ちゃんは、自分では食事をとることも、移動することもできない。私たちは、誰かに、ときに寝食を脇に置いてもケアをしてくれる他者によって育てられてきた。

人は、生まれてから死ぬまでの間に、他者からケアを受けなければ生存できない期間があり、乳児期と高齢期はその典型である。依存状態にある人は、栄養を与えてくれる、排泄を処理してくれる、日常生活動作を助けてくれる「他者」を必要とする。

私たち人間は、自分自身では満たすことができないニーズに応えてくれる他者がいるからこそ生存できるのであって、その意味で、「脆弱」である。たとえ健康であっても、誰の助けも必要とせず人生を生き続けることのできる人はいない。人間社会では、いつも誰かが誰かをサポートしている。相互依存し、支えあうこと

ALS(筋萎縮性側索硬化症)を発症し、主たる介護者として過ごした5年間だった。生活は激変し、ケアの負担と責任の押しかかる日々ではあったが、たくさんの素晴らしい出会いがあり、多くの実践知を獲得し、またケアの営みがもたらす特別な時間があった。苦労はあったが、相方を見送って思い出すのは、楽しい時間のことばかり…。

ケアとはいいったいなんなのか。自分の経験を再定義するうえで、さらに多くの示唆を与えてくれたのが、ケアの倫理との出会いだった。4年前に岡野八代さん(同志社大学教授)のケアの倫理に関する論文を読み、ケアの視点をつかってこのように自分の実践や社会を捉え直すことができるのか!と驚いた。それは、新鮮な感動だった。

この連載では、私が学んできた「ケアの倫理」を整理し、日々ケアの現場で働いているみなさんの力になるような学びの材料を提供できればと思っている。

第1回

ケアの倫理との 出会い

岡山県労働者学習協会 事務局長
ながひさ けいた
長久 啓太さん

それぞれの声に
耳を傾けよう

Café あなたの職場でも
ケアしたりケアされたりした経験を出し合ってみましょう。
人間にとてのケアについて自由に話してみましょう。

- それぞれの声(語り)に耳を傾けることを意識してみましょう。
- 相手の否定につながる言葉に気をつけましょう。また、話したくないことは話さなくて大丈夫です。
- 結論を出したりする必要はありませんので、新たな発見や意見を次の学びや職場づくり、様々な取り組みに生かせるといいですね。



ケアという言葉・実践

ケアという言葉は、英語Careからきてる。世話、配慮、関心、心配などの意味がある。ケアは第一義的に「子どものケア」を指し、その後、「高齢者介護」や「病人の看護」「障害者介助」、さらには「心のケア」というように、拡張して使われるようになった。

日本語圏でケアという用語が使われはじめたのは、1990年代以降、高齢者介護の分野が先だった。その後、「育児」「介護」「介助」の場合によっては「看護」を含むような包括的な用語として、他に代わる適切な日本語がなかったために、ケアはカタカナことばのまま流通するようになる。

ここで、ケア実践の特徴を整理してみよう^(注1)。

ケアは、生存にかかわるニーズを自ら満たせない人、誰かに依存せずに生きられない存在になれる。

ケアニーズは、個体的な理由とその人が置かれた状況により一人ひとり異なる。ケアされる人からのサインが受けとめられ、試行錯誤のなかで対応されたとき、ケアが始まる。

ケアを提供する人はしたがって、ケアを必要とする人に特別な注視、関心、配慮をむける。個別のニーズをつかもうとする感受性や集中力、その努力が求められる。

ケアする人とされる人の関係は、その個別のケアをめぐってケアする人にさまざまな知識や判断力、感受性、そして責任を要請する。

ケア関係にある人は、能力・体力、また責任において非対称的な力関係にあり、ケアされる人の身体や尊厳を傷つける可能性をねはらんでいる。

ケア提供者は、なにがよいケアなのかを実践のなかでつかみ取るしかない。しかし、なにが最善のケアなのかという普遍的な回答を得ることは難しい。日々悩みながら実践していくプロセスとなる。

次回取り上げるが、ケアを「実践」と捉えることで、その営みが研究対象となり、ケアの倫理は生まれてきた。(注1)雑誌『世界』2022年1月号、岡野八代「ケア／ジェンダー／民主主義」を参考に整理しています。

ケアの定義について

最後に、ケアの倫理を考える上で重要な、アメリカの政治学者、ジョアン・C・トロントのケア定義を紹介したい。

「もっとも一般的な意味において、ケアは人類的活動であり、わたしたちがこの世界で、できるかぎり善く生きるために、この世界を維持し、継続させ、そして修復するために、すべての活動を含んでいる。世界とは、わたしたちの身体、わたしたち自身、そして環境のことであり、生命を維持するための複雑な網の目へと、わたしたちが編みこもうとする、あらゆるもの

のを含んでいる」^(注2)

※本稿は『民医連医療』にも掲載しています。
全7回(2025年2月~8月予定)。

とても広いケア定義となっている。「この世界を維持し、継続させ、そして修復するためになす、すべての活動」がケアであるならば、民医連の共同組織による地域活動も、職員どうしの気遣いあいも、気になる患者さんへのアプローチも、市民の要求に応える政治も、みんな「ケア」なのかな?

答えは「YES」。私たちの日常は、ケア実践にあふれているのだ。この定義を知ったとき私は、なんだか、パ一っと視野が広がった思いがした。

ケアは広く、深い。引き続き、学んでいきましょう。

(注2)『ケアするのには誰か? 新しい民主主義のかたちへ』
ジョアン・C・トロント著、岡野八代訳・著、白澤社、2020年

つぶやきコーナー

